

KOMAZAWA × 中央大学

後半ロスタイム、残りワンプレーで試合終了という状況で中嶋(8番)の起死回生の同点弾が生まれる
(撮影・岩田陽一)



残り20分怒濤の反撃 駒大サッカーここにあり!

遅すぎた目覚め

「優勝に」皮一枚つながった」と試合後の秋田監督の言葉がこの試合の全てを物語っていた。

試合は立ち上がりから中大にペーすを奪われる苦しい展開。「中大はいまや全く違うチームになっている」(秋田監督)というように、この試合で上位チーム相手に好試合を演じている中大。前期の対戦では圧倒した駒大も、多少この波に吞まれた感があった。36分、CKのクリアボールを押し込まれ先制を許す。その後も容赦なく駒大ゴールを脅かす中大。だが、守備陣が最後の場面で耐えしのぎ、なんとか最小失点に抑えた。駒大は前半を通してこれといった見せ場はなく、受け身に回り相手に合わせたプレーに終始してしまっ

た。後半に入ってからなかなかリズムを掴めない駒大は、56分にエリア内でファウルを犯しPKを献上。それを確実に決められ0-2。そしてそのわずか1分後、動揺を隠せない守備陣はそのまま3失点目を喫す。試合はこの時点で駒大の敗色ムードが漂っていた。しかし、選手たちはこの絶望的な状況に陥っても『絶対に諦めない』という強い意志を持っていた。69分、中嶋が相手GKのクリアミスを逃さずゴールを奪う。この得点がゲームの流れを大きく変えた。まるでこれまで沈んでいたのが嘘だったかのように攻め立てる駒大。FWも下がり全員守備でゴールを固める中大に対し、圧倒的に試合を支配した。89分、中後のクロスボールを巻が頭で反らし赤嶺が追加点を挙げる。その後、中大小笠原が2度目の警告で退場。数的有利に立ちさらに拍車を掛ける展開に。そして終了間際、またもや中後、巻とつなぎ、最後は中嶋が執念でゴールを決めた。ここで試合終了のホイッスル。正に死闘と呼ぶにふさわしい試合だった。

決して負けてもおかしくない試合展開だった。それでも、あの逆境から引き分けに持ち込めたのは本当に価値がある。しかし、「最初から終盤で見せた戦いが出来ていれば…」と筑城が語ったように、駒大サッカーが目覚めるには時間がかかりすぎた。次節からはいよいよ上位チームとの直接対決となる。首位の筑波大が敗れ勝ち